一般論文

起業する台湾の若者と社会的な価値への志向[1)]

久木元 真吾
（公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員）
佐藤 美奈子
（早稲田大学理工学術院 非常勤講師）

台湾社会において、経済発展の時代に抱かれた「台湾ドリーム」は、経済的な成功であり富の蓄積であったが、経済的な展望が不透明な状況下で、台湾の若者たちにとってはそうした夢とは異なる志向がみられつつある。本稿は、台湾の若者たちが置かれた状況を確かめた上で、若者による２つの起業の事例を取り上げ、そこにみられる社会的な意味や価値への関心や、「台湾」を再発見する視線に注目して検討を加える。その上で、「小確幸」が台湾社会でキーワードとなっていることにふれつつ、台湾の若者たちの中にみられつつある、経済的成功に還元されない志向について考察する。

1. はじめに――「台湾ドリーム」を経て

佐藤（2003）は、戦後の台湾の経済発展と、その中で抱かれた「台湾ドリーム」を振り返る論文である。工場で働くことから始まって、自ら工場を経営することを夢見、子どもに夢を託して教育にお金を注ぎ、やがてハイテク産業の急成長を経て、中国大陸への進出にさらなる成功を期待する――という展開が描かれているが、論文の最後に、佐藤は次のように述べている（佐藤 2003: 111）。

……台湾の人たちはもう少し夢の幅を広げてはどうかと思う。富を追うあまり、彼らが失ったものは少なくない。例えば環境問題は依然として各地に山積みされている。もちろんそれに草の根で取り組む人たちも既にいるのだが、まだ社会の一部に限られている。個々人の金銭的な、あるいは物質面の富においては一定の水準に達した今、より広い視野から豊かさとは何かを問い、夢を再構築する時に来ている。

この論文の発表から15年近く経た現在、台湾社会において経済的な成功や富の蓄積は、やはり人々が追い求めるものであることには変わりないといえよう。ただ他方で、そのことが台湾社会の誰にとっても具体的かつ現実的な「夢」であり続けているといえるかどうかは、議論の余地があるだろう。著しい経済成長が見込めるわけでもなく、社会の中での格差が大きな問題であり続けている中で、かつての世代と同じような形で経済的な成功をめざすことは容易ではない。それに伴い、格差を乗り越えて成功を収めるという「夢」を抱くことが、必ずしも現実的なことには見えなくなっている可能性も否めないだろう。特に、後述するように多くの若者たちにとっては、経済的な成功のハードルはかつてよりもはるかに高いものに映じている可能性がある。

本稿では、台湾の若者たちに注目して、彼ら・彼女らの置かれた状況を確かめた上で、ストレートに経済的な成功を目指すという形ではない、社会的な意義や価値を志向して起業した若者たちの具体的な事例を2つ取り上げ、検討を加える。そ

のことを通じて、現在の台湾の若者たちにとっての価値の所在に関して、その手がかりを考察することにしたい。

2. 台湾社会における若者の状況と起業

2012年、台湾のある雑誌が、オーストラリアの食品加工工場で働く台湾の若者を紹介する記事を掲載した（楊 2012a, 2012b）。27歳の彼は、台湾の有名大学を出て銀行に2年間勤務したが、長時間労働、親への仕送りや学費ローンの返済などが重なる中で貯金もほとんどない状況である。金を稼ぐために、彼はやむなく銀行を辞めてオーストラリアに渡り、午後2時半から夜12時まで巨大な工場でベルトコンベヤーの横に立ち、冷凍羊肉の皮をはぐ作業をしている。決して楽ではない仕事だが、それでも1年間で100万元以上の貯蓄ができるといい、これは台湾での銀行勤めを続けていてはとても無理な金額だという。こうした台湾の若者の例は少なくないというのが記事の内容であった。この記事は台湾で大きな反響を呼び、今の台湾の若者たちが置かれた苦境を象徴的に示す例として受け取られていった。

台湾の若者の仕事をめぐる現状は、長期にわたり困難な状況にある。若干の回復傾向が見られ始めているとはいえ、若者の失業率は高く（2017年8月時点の失業率は、全体で3.89%であるのに対し、20 ～ 24歳で13.18%、25 ～ 29歳で6.71%[2]）、仕事に就いても賃金は低い（2016年の大卒者の初任給は28,116元[3]）。1995年に24だった大学の数は、2015年には126となっており、大学進学がごく一般的なことになる中で、大学を出たからといって、親の世代の大卒者なら就けた仕事に就くことも難しくなっている。

付言すると、台湾社会での若者（特に大学の新卒者）の就職は、日本とはかなり異なっている（董 2006）。日本のような新卒一括採用の習慣はなく、企業は通年にわたり不定期採用をしており、新卒であっても一般の転職者と同じジョブマーケットで競うことになる[4]。そのため、経験やスキルのない新卒の若者はジョブマーケットでどうしても不利であり、失業率が高くなってしまうのは致し方ない面もある。

とはいえ、そのことを加味したとしても、若者の仕事をめぐる状況は厳しいといえよう。特に低賃金の問題は深刻で、上述した通り、ここ10年でみた場合、大卒の初任給はほぼ横ばいに近く、物価水準を加味すると実質的に低下しているほどである。こうした事態を受け、政府は2009年から新卒者の採用を進めるために、新卒者を採用した企業を補助する制度（採用一人あたり22,000元（＝22K）を企業に補助）を実施したが、意図に反して補助の額しか新卒者に払わない企業が登場することになった。かえって初任給の水準を下げることになったとして、若者たちの不満はさらに高まり、「22K」は若者の低賃金を象徴するキーワードとなった。冒頭で取り上げた記事の若者がオーストラリアで働いているのも、こうした台湾社会の若者の状況が背景にある。

このような若者の仕事をめぐる問題に対して、社会的な対応としてさまざまなものがありうるが、注目されるのは「起業」に関するものである。

しばしば指摘されるように、台湾社会には独立・創業への志向が根強く存在している（沼崎 1996）。人に雇われて働くよりも、自分自身がオーナーや主人となって独立自営で事業を行うこと、いわば「一国一城の主」になることを志向するというものであり、たとえ今は人に雇われて働いているとしても、いずれは資金を貯めて独立することを目指しているというわけである。転職が一般的だと上で述べたが、よりよい条件の転職を重ねた結果、いわばゴールとして独立し起業するというイメージである。

2015年にある求職サイトが実施した調査では、雇われて働いている人の92%が将来起業したいと考えており、26.5%は実際に何らかの事業を始めているという（ただし、その後起業した事業の経営を継続できているのは5%にとどまっている）[5]。このように独立・起業志向が広く存在するため、台湾には非常に多くの中小企業が存在しており、鴻海やジャイアントなど、台湾の有名な大企業にも個人が始めた中小の事業が発展した例が少なく

ない。起業に対する姿勢・能力・意欲を評価する「グローバル起業家精神指数」の国際ランキングでも、台湾は2015年に132カ国中6位（アジアでは1位）になるなどたびたび上位となっており[6]、国際的にみても起業に積極的な社会であるのは確かだろう。

もちろん、起業しても失敗に終わるケースが多々あることは言うまでもないし、また台湾経済や世界経済の動向に左右され、独立への動きが活発でなくなる時期があるのも確かである。しかしそれでも、経済的な行き詰まりや困難に際して、独立して起業することに可能性を見いだす傾向は、台湾社会では一貫して強いといえよう。台湾において起業することは、個人のサクセスストーリーのモデルとしてイメージされやすいものであり、社会の活力の源であるとみなされ続けている。

そしてそうであるがゆえに、困難な状況にある今日の若者を支援するにあたっても、起業への支援は重要なアプローチの一つとされることが多く、具体的かつ多彩な支援が展開されている。例えば、2015年に開設された「青年創業及圓夢網」は、起業を志す若者向けのポータルサイトで、資金援助・事業計画のノウハウ・登記の方法の詳細など、政府による若者の起業への支援に関する情報が、複数の所管官庁をカバーする形で集約されている[7]。あわせて、ワンストップ型の起業支援の拠点「青創基地」を台湾各地に設け、起業支援の相談や情報提供・ネットワークづくりの場として運営している。また蔡英文総統も、2016年9月に若者は「単なる就業者ではなく、創業者（起業家）を目指すべき」と述べ、若者の起業への期待を表明している[8]。

こうした政府の支援に非常に大きな意義があるのは確かであるが、難しいのはこの先である。ここでは2点指摘しておこう。

第1に、起業が何をどこまで解決できるかである。独立・起業への志向の背景の一つには、雇われて働く立場の弱さ、特に賃金の低さがある。では、実際に起業して事業が軌道に乗り、人を雇う側になった時に、支払う賃金は果たして多くなるだろうか。蔡英文は上で紹介した発言の際に、自身が創業者になった場合は労働者を大切にすべきで、そうしてこそ台湾の労働問題を解決できるとも述べているが、低賃金という出発点の問題が、若者の起業の促進を通じて解決に至るかどうかは、決して定かではない。

第2に、現在の状況の困難さにより、起業への関心自体が揺らいでいる可能性である。低賃金や失業率の高さ、見通しの不透明さなどから、起業への関心よりも、安定した雇用を得て落ち着きたいという志向が若者の中で出始めていることが指摘されている（沼崎 2014）。起業が帯びている経済的な成功のイメージが、現実の仕事の状況がなかなか改善しない中で、実現・成功の可能性があまり期待できず、かつてほどの魅力を持てなくなり始めている可能性がある。

こうした中で、台湾の若者たちの中で、ビジネスとしての成功や、大きな収益を達成する大規模な事業の発展ばかりをめざして起業するのではなく、自分たちの視野の範囲で成立する小規模な事業や、さらには社会的な課題の解決や、社会的に価値あるものの保存・活用など、起業した事業自体の社会的な意味を重視する例がみられるようになっている[9]。経済的成功よりも社会的な意味を重視する志向自体は、台湾に限らず近年の諸社会の若者たちにみられることかもしれないが[10]、台湾の場合は従来からの起業への関心があることと重なって、より具体的な形として結実し、さまざまな起業の事例が生まれている。そしてその事業が、若者たち自身にとっての「台湾」を再考し再発見することに結果的につながっている点が、注目すべき特徴であると考えられる。

こうしたいわば新しい起業のあり方と、そこにみられる若者の姿を、以下では具体的に2つの事例を取り上げて探っていくことにしたい。

3. 第１の事例――「天空的院子」

若者の都市部への流出、地方の過疎化といった問題は、台湾でも大きな問題となって久しい。そうした中で、若者たちが自らの出身地で活動を行い、その状況に一石を投じようとする動きが見られる。

2016年の夏、台湾の三菱自動車（三菱汽車／中

華三菱）は、困難な状況に直面する台湾の各地域において、若者たちが行っているさまざまな取り組みに注目し支援する活動「青春還郷」を開始した[11]。その一環で製作され公開されたのが、「青春還郷」と題したCMである[12]。

このCMの冒頭では、田舎で祖父母と暮らす小学生の少年の日常が映し出される。帰宅して昼食を準備する祖母のもとに駆け寄る少年。「おじいちゃんにご飯だって言ってきて」。うなずいた少年はバナナ畑で働く祖父のもとへと駆けていく。「おじいちゃん、ご飯だって。ほら、僕がお手伝いするから」。田舎のごくありふれた日常。そして、この家庭を取り囲む台湾社会の現状について、テロップが静かに流れる。

「平均すると、2世帯につき1人、子どもが故郷を離れて職に就く。働き盛りの25～44歳の人口の8割は6都市（台北、新北、桃園、台中、台南、高雄）に住んでいる。祖父母が孫の世話をする家庭がこの10年で4割も増加した。その最大の理由は、両親が家を離れて仕事をしているからだ。去る人は多い。戻る人は少ない。」

このCMは、こうした田舎の風景に続いて3人の人物を紹介する。最初に登場するのは、台東の郊外・都蘭に拠点を置きながら活動するアミ族出身の歌手・舒米恩（スミン）、次に南投県の山間部・竹山で「天空的院子」という民宿を経営する何培鈞、最後に高雄市の山間部・旗山で父の経営するバナナ園を手伝いながら「台青蕉樂團」というバンドで音楽活動を行う王繼維である。

この3人の共通点は、一度離れた故郷に戻り、そこを拠点にして新しい活動や事業を行って成功を収めている点である。ここでは、二番目に登場する何培鈞に特に注目することにしたい[13]。1979年に南投県で生まれた何は、台南の大学に進学し、医療マネジメントを学んだ人物である。しかし彼は卒業後、両親の住む竹山に戻って「天空的院子」という民宿をオープンしている。

何培鈞が民宿を開いた竹山鎮は阿里山の北部にあり、古くは原住民と漢人が時に対峙し、時に交易を行った山間部の要衝である。良質な竹の産地であったため、日本統治期に「模範竹林」として接収され「竹山」と名が改められた。しかし戦後は竹産業が衰退し、それに代わる産業を見いだすことができなかったため次第に活気を失っていく。最盛期には約6万3,000人ほどだった人口も約5万5,000人まで減り、さらに減少が続いている。

何培鈞は台南の大学に在学していた時、竹山に帰省するたびに近くの山をハイキングすることを楽しみにしていた。ある日、彼はハイキングの途中に、山中に打ち捨てられた立派な三合院の建物を見つける。その素晴らしさに心を動かされた彼は、大学卒業後、銀行を回って融資を募り、建物を買い取り、医学部生であった従兄と2人で建物を修復する。3年後、築百年の趣を残しながらも現代的な快適さを取り入れた宿に生まれ変わったこの建物は、「天空的院子」という民宿として再出発する。当初こそ集客に苦戦したものの、次第に評判となったこの宿は、今では「台湾で最も美しい民宿」として広く知られるようになった。その人気は、ひどく交通が不便な山あいにあるにもかかわらず、海外からも多くの宿泊客が訪れるほどになっている。

この何培鈞のエピソードは、印象的かつ奇跡的なUターンの例のようにみえるが、それだけを意味するものではない。むしろ、彼のエピソードが象徴しているのは、台湾の若者たちにみられる従来の価値観からの転換である。

この意味でまず注目すべきは、彼が多くのインタビューで「故郷／地方にビジネスチャンスがある」と強調していることである。豊かな生活やビジネスチャンスは都会にしかないと考えられがちだが、彼はこの考え方に疑問を投げかけ、「故郷／地方にこそ豊かな可能性がある」と述べる。それは、故郷や田舎が単なる郷愁の場ではなく、豊かな生活基盤を与え、自らを未来へとつなげる場所であることを意味するだろう。実際に、彼は「天空的院子」が軌道に乗った後、竹山という地域ならではの産業や文化を活かしたプロジェクトを立ち上げ、この点でも注目を集めている。このような「故郷／地方」の捉え直しは、台湾の若者の中に生まれつつある新しい価値観を示すものと言えるだろう。

しかし一方で、何培鈞が単に利益を得るためだけの手段として故郷を見ているわけではないことも注目に値する。廃屋であった「天空的院子」を再生しようとした動機について、彼は「長い時間をかけたものにしか生まれない文化の趣」をそこに感じたからと説明している。しかし、そんな22歳の彼の言葉に対して、周囲の「大人」たちは「こんな古びた家をどうする気だ？ 壊した方が早いだろう」と取り合わなかったという。「大人」たちが見捨ててきた古い物を拾い上げ、そこに自らの現在を築き、未来につなげることが可能であることを何は示してみせた。これもまた台湾の若者の中に生まれつつある意識を示しているのではないだろうか。新しい物をただ追い求めるのではなく、立ち止まって古い物を再評価する。それはまた、彼らの生きる「台湾」という場を再考することにもつながっているだろう。

ここで紹介した何培鈞は、確かにユニークかもしれないが、必ずしも特殊な例ではないことも強調しておきたい。冒頭で紹介した三菱自動車のCMに登場する他の2人も、故郷に新たな価値を見出し、そこに自らの生活の基盤を築き、未来へつなげようとする試みを行っている。また「青春還鄉」のウェブサイトで数多くの事例が紹介されているように、CMに登場していない多くの若者たちが、彼らと同じように故郷に、地方に、田舎に戻り、さまざまな新しい試みを各地で行っている。もちろんそれらはまだ、地方の過疎化や若者の都市流出という台湾社会の大きな流れに決定的な変化を与えるほどのものになっているとはいえない。だが、冒頭で紹介したCMで描かれたような台湾の地方社会の現状に、経済的成功とその還元というだけではないスタイルで、新たに立ち向かおうとする若者たちが現れていることは、注目に値するだろう。

4. 第2の事例 ——「在欉紅 Red on Tree」

ビジネスとしての成功ばかりをめざして起業するのではなく、起業した事業自体の社会的な意味を重視する例がみられる中、そのような起業のあり方と、そこにみられる若者の姿について、もう一つ具体的な事例を紹介したい。ここで注目するのは「ジャム」である。

台湾の土産物と言えば、カラスミ、中国茶、パイナップルケーキなどが思い浮かぶかもしれない。実は、こうしたかつての典型的な土産物のイメージは、ここ10年で着実に多様化しつつある。デザイン性の高い雑貨、良質な素材にこだわった調味料や菓子などが次々に現れ、かつては想像もされなかった物が台湾土産として注目を浴びるようになってきた。そうした品の一つに、台湾製のジャムがある。台湾産のフルーツを生かした、台湾ならではの個性を持つジャムが多数登場している。その多くは、あくまで「台湾産」であることにこだわりを持って生産されており、そのことを強くアピールしていることがしばしばである。

ここでは、近年のジャムブームの先駆けともいえるブランド「在欉紅 Red on Tree」を取り上げることにしよう[14]。「在欉紅」は、顧瑋と林哲豪という2人の若者によって創業されたブランドである。2008年の創業時、顧は台湾大学分子医学専攻の修士課程を修了したばかり、林に至っては台湾大学園芸学専攻に在籍中であった。専攻していた領域とはまったく違う分野で、彼女たちはなぜ起業したのだろうか。

きっかけは、修士課程を修了した顧が、留学準備期間中にカフェでアルバイトをしたことだった。もともと食べることが好きだった顧は、飲食業に関わる中で台湾産の果物の現状に関心を抱くようになる。台湾は南国フルーツの一大産地であるにもかかわらず、果物の輸入量が輸出量を大きく上回る。傷みやすい南国フルーツは輸出するにはさまざまな困難がある上に、他国の安価な品に市場を奪われて伸び悩んでいた。結果として、果物が採れても収益があがらず、場合によっては買い手が見つからぬまま廃棄されてしまう。では、これをジャムとして加工すればどうだろう。保存がきくので販路も拡大でき、台湾の果物生産者を支援することにもつながる。そう思いついた顧は留学をやめ、林をはじめとした同世代の若者たちと共

に、台湾製ジャムの生産・販売業を起業することにする。

しかし、ジャム作りを始めた彼女たちはすぐに壁にぶつかる。上質なジャムには甘み・酸味・香りが必須とされるが、南国フルーツは甘みが強くても酸味と香りが欠けている。特に昨今、市場で人気なのは水分量が多くて甘みが強い、ジャム作りには向かない品種である。そこで顧たちは、台湾全土で生産されている果物を調査して各地に足を運び、ジャム作りに適した品種を探し続けた。そしてついにある品種を見つけたのだが、それは昨今の市場では顧みられなくなった台湾原産種の果物であった。

顧たちは、生産者本人が自宅用に細々と栽培していたこれらの果物を買い付けることにしたが、その際にも新しい試みを行った。農家と直接取引することで中間マージンをカットし、農家に公正な利益が渡るようにしたのである。フェアトレードと呼ばれるこの方式を取り入れることで、若い顧たちは生産者の農家と信頼関係を築いた。その後も、有機栽培にこだわる農家と契約を結び、彼女たちは良質な果物の入手経路を確保する一方で、農家を支援する仕組みを作り上げていった。

こうして「在欉紅」は、有機栽培された旬の果物だけを使って、保存料・添加物を加えないで手作りのジャムを作るブランドとして誕生した。もちろん、完成したジャムは一般的なものに比べると高価なものとなる。しかし、その味わいと品質が評価され、「在欉紅」は短期間で台湾製ジャムを代表するブランドとなった。

顧や林が通った台湾大学は、言うまでもなく台湾随一の名門大学である。こういった名門大学を出た者に関しては、社会的地位を得て、多くの収入を得ることが期待されたり、そうなることが「成功」であるとみなされたりするのが一般的であろう。しかし、「在欉紅」のエピソードからうかがえるのは、少なくとも顧や林には、そうした選択よりも重視するものがあったということである。顧は多くのインタビューで、社会的意義を持つ仕事をすることの重要性を強調している。自分自身が豊かになるだけでなく、自分の仕事を通して社会をより良いものに変え、自分以外の人も豊かにしていきたいのだ、と。

多くの収入を得て他者に認められる肩書を持つことが幸福なのではなく、社会をより良くし、他者を豊かにすることで自分も豊かになることが幸福である――こうした意識をもつ若者たちが、「新しい台湾特産品」が生み出される原動力にもなっている。そしてその活動が、同時に見失われかけていた「台湾」を再発見する過程にもなっている点も、「天空的院子」と同様に注目されるといえよう。

5.「台湾」への関心と「小確幸」

台湾社会の若者は、難しい状況の中で新しい試みに取り組む例がみられるとして、2つの事例を取り上げてきた。2つの事例はいずれも、社会的な意味や価値への関心を、自らの起業の出発点に置くものであった。そしてどちらも、竹山というローカルな地域と台湾原産種の果物という違いはあるものの、ローカルな地域から台湾自体までも含む、広く「故郷」ないし「出身地」の意味や価値を見直すことにもつながっていたといえるだろう。

こうした点は、近年の台湾社会、特に比較的若い世代における「台湾」への関心の高まりと響きあうものであろう。台湾社会において台湾意識や台湾アイデンティティが強まってきたということ自体は、近年に限らず何度も指摘されており、新しいことのようには聞こえないかもしれない。ただし、民主化以降の従来の台湾意識の高まりは、特に自らの出自に関して、「中国」に対する「台湾」を強く意識するというものであった。台湾への関心は、中国的な面ではなく台湾的な面を重視するといった、対比の上での選択という性格が相対的に強かったと考えられる。

これに対して、民主化以降の台湾で生まれ育ち教育を受けてきた世代にとっては、いわば最初から台湾は台湾であり、他とは明確に区別された台湾社会において生きてきたという感覚を抱くことになる。こうした意識を有する若い世代は、台湾

が自然に・自明に独立した社会であるという感覚があり、台湾以外にアイデンティティを感じられないことから、近年「天然独」と呼ばれることがある（野嶋 2016）。「天然独」の若者たちには、中国的なものとの対比やその上での選択という契機はなく、自明に自らの社会として台湾をとらえているのである。したがって、「天然独」というときの「独立」には、従来の「台湾独立」という主張が帯びていた、「統一か独立か」という強い対比のもとで積極的な行動を通じて独立を勝ち取ろうという含意は希薄である。

この世代――大雑把に言えば、30代以下の世代――にとって、「台湾」への関心は、他の何かとの対立や反発を経由していない、自分の生まれ育ったこの台湾へのシンプルな関心である。自分＝この台湾とは何かという素朴な関心に根差して、さまざまな試みが展開されているのが現在だと思われる。

「台湾」への関心は、例えば台湾という土地への関心に具体的に表れている。つまり、台湾という島や、台湾の自然・文化、さらには台湾の各地域・各コミュニティへの注目である。典型的な例が、映画『練習曲』を機に起こり、現在に至るまでブームとなっている「環島」であろう。自転車に乗って台湾を海沿いに一周する「環島」は、台湾という島の輪郭を具体的に確かめる営みであり、そのことを通じて独立した空間としての台湾を体感することになり、同時に台湾各地のさまざまな生活の営みをみることにもなる[15)]。

そして、本稿で取り上げた「天空的院子」や「在欉紅」も、いずれも台湾のローカルな諸地域に根差すものでありながら、その価値が十分に気づかれてこなかったものに若者たちが現代的な価値を再発見し、それを訴えようとする試みであった。そして、「天空的院子」や「在欉紅」を「成功」した例と位置づけうるのならば、そのことはやはり、この「台湾」への関心と響きあう要素を伴っていたことが無視できない背景にあるといえるだろう。

以上のような「台湾」の再発見と関心の高まりは、現在の台湾社会全体にみられるものであるが、「天空的院子」や「在欉紅」の事例のように、若い世代にもみられる点が注目される。ここまで「再発見」という言葉を使ってきたが、実は若者たちにとっては既存の何かの「再」発見ではない。何培鈞が廃屋であった「天空的院子」に注目し、顧瑋と林哲豪が顧みられなくなっていた台湾原産種の果物を見いだしたように、むしろ若者たち自身にとっては「新発見」というべきであろう。つまり、若者たちからすれば、「台湾」は単に懐古的なものではなく、自分たちのルーツやアイデンティティの探求でありながらも新しく発見されるものであり、新鮮なものでもあるからこそ一層若者たちを引き付けている面もあるといえるだろう。

ただ、さまざまな水準での「台湾」の再発見・新発見と響きあう形での、社会的な意義や価値への関心が、単なる経済的な成功よりも志向される事例が生まれてきているのだとしても、それは本稿の前半で述べたさまざまな困難をすべて打ち消すものとまではいえない。2つの事例のような起業を実現できない多くの若者にとっては、経済的閉塞に伴う将来展望の難しさはやはり大きな問題であり続けている。

若者たちが自らの人生の将来を考えるとき、賃金の低さや住宅価格の高騰などから、納得のいく将来展望を抱きにくい状況にあることは非常に大きな問題である。地方の出身地を離れ台北へ、台湾を離れて海外へと若者が移動していくのは、より豊かな、より新しい可能性を求めてという積極的な面もあるが、低賃金ゆえに地元や台湾を離れざるをえないという面もある。若者たちの親の世代なら実現可能だった一定の豊かさや経済的な安定が、現在では必ずしも容易でなくなりつつあるにもかかわらず、親の世代からの期待が変わらないプレッシャーもある。

2014年頃から、台湾で「小確幸」という言葉が、特に若い世代に注目されているのは、こうした閉塞感が背景の一つにあるといえよう（朝日新聞 2015）。「小確幸」は村上春樹のエッセイに出てくる表現で、「小さいけれど、確かな幸せ」という意味である。この記事が指摘しているように、台湾社会で若者たちにこの言葉が注目されている

のは、経済の先行きに期待を持てず、「大きな幸福」を求めることが現実的ではないと感じられる状況の中で、日常生活の中のささやかな幸福感を大事にしたいという感覚が、「小確幸」という言葉に見いだされているからであり、それゆえに台湾の若者たちの共感を集めているといえるだろう。

本稿の冒頭で取り上げた、佐藤（2003）が描く「台湾ドリーム」の変遷からすると、かつてその「ドリーム」を追い求めてきたより上の世代の中には、「小確幸」を大切にしようとする現在の台湾の若者たちの姿に、物足りなさを感じる人もいるかもしれない。しかしこれは、「台湾」やローカルなものの価値を再発見する視線ともつながっており、いわば地に足の着いた姿ともいえよう。大志や野望を抱くこととは異なるかもしれないが、等身大の視点で、自分の足元から、自分と他者にとって意味のあるものを求めること自体は、簡単ではない状況に生きる若者たちにとっては十分にめざすに値することなのではないだろうか[16)]。

不透明な展望の中で、どのように意味を感じられる人生を送り、日々の生活を営むかということは、台湾のみならず世界の多くの若者たちにとって共通の現代的な課題であろう。本稿の考察は予備的な議論にとどまっており、台湾の若者たちの動向をさらに検討し、日本を含む他の社会の若者たちの状況や実践と比較考察することを、今後の課題としたい。

注

1）本稿は久木元（2017a, 2017b）および佐藤・久木元（2017a, 2017b）を基礎として執筆したものである。本稿の3節および4節は佐藤が、残りは久木元が執筆したものがもとになっている。本稿は、今後の本格的な検討に向けての準備的な考察として執筆されたものであり、より本格的な考察は、研究を継続した上で、将来の別の機会に試みることにしたい。

2）行政院主計總處のウェブサイトによる（https://www.dgbas.gov.tw/ct.asp?xItem=41818&ctNode=5624&mp=1）。

3）勞動部のウェブサイトによる（https://www.mol.gov.tw/announcement/2099/32362/）。大学新卒者の初任給の金額は近年ゆるやかに上昇しているが、28,000元を超えたのは2000年以来16年ぶりのことで、16年を経てようやく元の水準を回復した（つまり、16年前と同程度の金額でしかない）ということでもある（聯合報「你有感嗎？ 隔16年 大畢生起薪重返28K」（2017年6月1日））。

4）台湾では転職はごく日常的なことであり、よりよい条件の仕事のチャンスがあれば躊躇なく転職するのが一般的であるといえるだろう。

5）中央通訊社「調查:薪資停滯 9成2上班族有創業夢」（2015年9月24日）。

6）自由時報「創業精神排名 台灣全球第6、稱霸亞洲」（2015年11月13日）。アメリカのThe Global Entrepreneurship and Development Institute（GEDI）による指標。

7）URLは以下の通り。http://sme.moeasmea.gov.tw/startup/

8）中央通訊社「解決勞工問題 總統期許青年當創業者」（2016年9月4日）。

9）以下で取り上げる例を、いわゆる「社会的起業」と同列に扱うことは保留しておきたい。少なくとも以下の2事例は、社会的な問題意識はあるものの、問題の解決自体を目的にしているとまではいえないからである。

10）アメリカに関しては、例えば佐久間（2014）を参照。なお台湾に関しても、王ほか（2010）に描かれている「簡單生活（Simple Life）」への志向を、関連する動きとして指摘することもできるだろう。

11）詳細は、ウェブサイト「青春還鄉」を参照（http://www.mitsubishi-motors-young.com.tw/）。

12）YouTubeで公開されている（https://www.youtube.com/watch?v=1v_j1mDyg9E）。

13）以下、何培鈞および「天空的院子」についての記述は、何（2015）を参照している。また、何の活動と「天空的院子」については、レジャー・観光学の視点から考察した研究（詹・黃 2017）もある。

14）以下、「在欉紅」については、公式ウェブサイト（https://redontree.com/）および李（2011）などを参照している。

15）台湾の歴史への注目も、同様の例として挙げることができるだろう。特に、著名な人物たちが登場する歴史よりも、そうした著名人とは異なる立場の人たちが営んできた歴史がより注目されている。近年の映画『KANO』や『湾生回家』のヒットもそうであるし、台湾各地で積極的に展開されている古い建築物（日本統治時代のものも少なくない）のリノベーションによる活用なども含まれるかもしれない。こうした動向は、日本では植民地統治への肯定的な評価と誤解されることもあるが、実際に台湾が歩んだ日本統治時代という時期を、台湾固有の経験として、つまり「自分たちの歴史」の1コマとして思い入れをもって再発見しているとみるのが適切であろう。特に、日本を含む多様な歴史的文脈の存在にこそ台湾らしさが見いだされているともいえるだろう。

16）台湾の若者の状況を特集したある雑誌で、アメリカでカフェを営む台湾出身の女性の言葉が紹介されており、彼女はカフェ経営のような「小確幸創業」が、経済の発展に寄与するようなものでないという否定的な見方に対して、人材・サービスのあり方・文化的な価値などの点で、「小確幸創業」であっても世界的なインパクトをもたらす可能性を有していると反論している（Chen 2017）。

文献

朝日新聞，2015，「「小確幸」台湾でブーム――村上春樹さんエッセーの言葉」『朝日新聞』2015年8月18日夕刊，3.
久木元真吾，2017a，「台湾社会と若者（2）若者の仕事の状況と起業」『台湾協会報』750: 2.
――――，2017b，「台湾社会と若者（5）台湾社会のこれからと若者」『台湾協会報』753: 2.
――――，2017c，「台湾社会と若者の「公民意識」の諸相――大学生と選挙・高校生と制服」『季刊家計経済研究』113: 62-70.
佐久間裕美子，2014，『ヒップな生活革命』朝日出版社.
佐藤美奈子・久木元真吾，2017a，「台湾社会と若者（3）台湾を再発見する若者たち（1）「天空的院子」」『台湾協会報』751: 3.
佐藤美奈子・久木元真吾，2017b，「台湾社会と若者（4）台湾を再発見する若者たち（2）「在儀紅」」『台湾協会報』752: 2.
佐藤幸人，2003，「台湾ドリームの移り変わり――経済発展がもたらした夢、夢がもたらした経済発展」『アジア遊学』48: 102-111.
董荘敬，2006，「若年者の雇用問題と職業能力の形成の日台比較――「学校から職業への移行」を中心として」『日本労働社会学会年報』16: 155-195.
沼崎一郎，1996，「台湾における「老板」的企業発展」服部民夫・佐藤幸人編『韓国・台湾の発展メカニズム』アジア経済研究所，295-318.
――――，2014，『台湾社会の形成と変容――二元・二層構造から多元・多層構造へ』東北大学出版会.
野嶋剛，2016，『台湾とは何か』筑摩書房.
Chen, Eunice, 2017,「不要再歧視小確幸創業」『天下雑誌』628: 122.
何培鈞，2015，『有種生活風格，叫小鎮――天空的院子 翻轉地方的夢想、信念、價值』天下文化.
李雪莉，2011，「在儀紅 煉製最台灣味的果醬」『天下雑誌』415.
詹芬樺・黃孟立，2017，「民宿業者帶動社區永續觀光發展――以天空的院子為例」『運動休閒餐旅研究』12（2）: 55-66.
王鵬淩・E Jay・陳怡如，2010，『簡單生活的寧靜革命 We Are Beautiful』大塊文化.
楊紹華，2012a，「清大畢業生為何淪為澳洲苦勞」『今周刊』821.
――――，2012b，「一流大学を出ても出稼ぎ 若者から希望を奪う経済」『週刊東洋経済』6422: 110-111.

くきもと・しんご　公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員。主な著書に『グローバル人材とは誰か――若者の海外経験の意味を問う』（共著，青弓社，2016）。社会学専攻。（kukimoto@kakeiken.or.jp）

さとう・みなこ　早稲田大学理工学術院 非常勤講師。主な論文に「「奴隷」の精神と「任侠」の精神――『支那革命外史』前半部に見る北一輝の日本批判」（『文化』（駒澤大学）30，2012）。日本政治思想史専攻。